

四旬節第4主日
ヨハネ9・1-41
生まれつきの盲人

2014.3.30

オリビエ・シェガレ
(パリミッション会司祭)

生まれつき目が見えない人の癒しのエピソードを聞きました。長い話ですので、さっきの朗読が大分省略されたが、多くの人物が登場しています。彼らを通して私たちの姿が映されているのではないかと思います。

最初はイエスの弟子たちが出て来て、目が見えない人を見てイエスに尋ねます。「この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したからですか。本人ですか。それとも両親ですか」と。弟子たちの考え方は、人は善い行いをすれば善い報いがあり、悪い行いをすれば悪い報いがあるといういわゆる因果応報の法則に縛られ、目の前にいる人の痛みに関心です。今でも健康である私たちは、因果応報ではなくても、可哀想と言いながら、あれこれと頭の理屈に心が捉われ、目の前に悩んでいる人の苦しみに共感がなく、実際は見えていないことが多いではないでしょうか。

盲人がイエスに癒された後も多くの人が出てきます。最初に登場するのは寄り集まった近所の人々で、いわゆる野次馬たちです。道を通るといつもここに座っていた盲人は一体どうしたのかしら。彼らは好奇心から質問し始め、そして事件の意味について互いに言い争っているが、盲人自身には全く関心がありません。人の痛みを気にせず、テレビニュースに映っている様々な事件のことを興味半分見ている私たちの無関心に似たものかも知れません。

次に来るのはファリサイ派の人々。彼らはいつもの通り、人の喜びにまったく感動せず、イエスが安息日のルールを破った一点にこだわり、ぶつぶつ不平ばかり言います。時々私たちもファリサイ派の人のように人の喜びよりも、決まりにこだわるか、あるいは世間の常識を唯一の物差しにして冷たい裁きの目で人を見ることはないでしょうか。

次は癒された人の両親が登場します。彼らはもうずっと前から、障害を持って、食べて行くために乞食をせざるをえない息子のことを恥として、心から棄てていたでしょう。「彼とは、問題の事件とは、関係がないよ。息子は大人だから本人にお聞きしてください」と、逃げてしまいます。私たちも世間の目を気にして、不幸な人々を目の前にしても、波風を立てないような無事な方向を選

び、問題がある時に多数意見の側に安住を求め、いい子ちゃんである生き方の選択を取ることがありませんでしょうか。

結局、イエスの弟子も、近所の人、ファリサイ派の人々も、親戚の人、全員が何か心に捉われていて、それぞれ閉ざされた世界に閉じこもり、いつも傍に座り、物乞いし、目が見えない人を見ていなかったし、癒されたとしても素直に彼を受け入れようとしません。その人の痛み、その人の孤独、同じ人間であるこの人の思っていること、感じていることに興味も同情も示しません。思っているとすれば、物乞いのこの人は汚い、社会の迷惑であることに変わりがないという思いです。そして、イエスと出会うまで目が見えなかった人の方は、皆のこのような冷たい視線、軽蔑のこもった気持ちを肌で感じ取っていて、諦めていたのではないかと思います。

ところが、彼が予期していなかったことが起こります。時々名前を耳にしていたイエスという方が自分の座っている所の道を通りかかり、自分を見かけてくれて、立ち止まりました。そして当時の治療師のように、唾で土をこねて目を塗ろうとしています。その瞬間、目が見えない人がこねた土の感触というより、初めて自分を肯定するような人の眼差しを感じ取ったのでしょうか。初めて自分の心に希望が湧き出てきます。そして、イエスの指示に従って素直に目を洗い、癒されたことを悟ったのです。彼の信仰は理屈抜きの非常に単純なものとして現れます。自分の目を癒したあの方はただの治療師だけではない。肉眼の目だけではなく、心の目も開いてくださいました。あの方はただの預言者だけではなく、この世に神様から約束された真の救い主、真の光りではないか。信仰の目が徐々に開かれてくる盲人と逆に、世間の常識や教えられた伝統に心が捉われながら自分たちがちゃんと見えていると思い込んでいるファリサイ派のような熱心な人々は、信じることができません。「自分たちは何でも理解している、見えている、わかっている」と思い込んでいるだけで、目の前の人間の生きている現実の姿が見えていないし、世に行なわれている神のわざも見えてきません。イエスが度々非難している「目があっても見えない、耳があっても聞こえない」という人々のことでしょう。

今日の福音のメッセージから、よく知られているサンテグジュペリの星の王子様の言葉が連想します。「大切なものは、目では見えない。心で探さなくては」と。大切に目に見えないのは命、魂、空気、意識、心、思い、愛などですが、現代社会ではこうした目に見えないものは不確かなものとして意識せず、分かりやすい目に見えるものだけを意識する傾向がついてしまったのです。人を見る時も同じです。人の服装、学歴、経歴などにとらわれてしまい、心を見ようとしません。

今日のキーワードは光です。「あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています」とパウロが訴えています。キリストの光をもって現実を照らして、見えないものを心で感じる力が私たちに与えられますように。そして私たちと教会共同体は、第二バチカン公会議が訴えたように、人々の悲しみや喜びを感じ取りながら、共に生き、現実の中に行なわれている神のわざのしるしが見え、素直な心が与えられますように祈りたいと思います。